

森林施業の長期的方針

～ 人工林の健全化とその維持について ～

1 背景

(1) これまでの方針

- これまで、水源涵養機能及び土砂災害（表層崩壊）防止機能の向上を目的として、**下層植生が繁茂した状態を「健全」**ステージとし、このステージへの誘導を最優先事項として間伐を行ってきた
- 健全ステージの指標となる立木密度が **1,000 本/ha** 程度（目安）

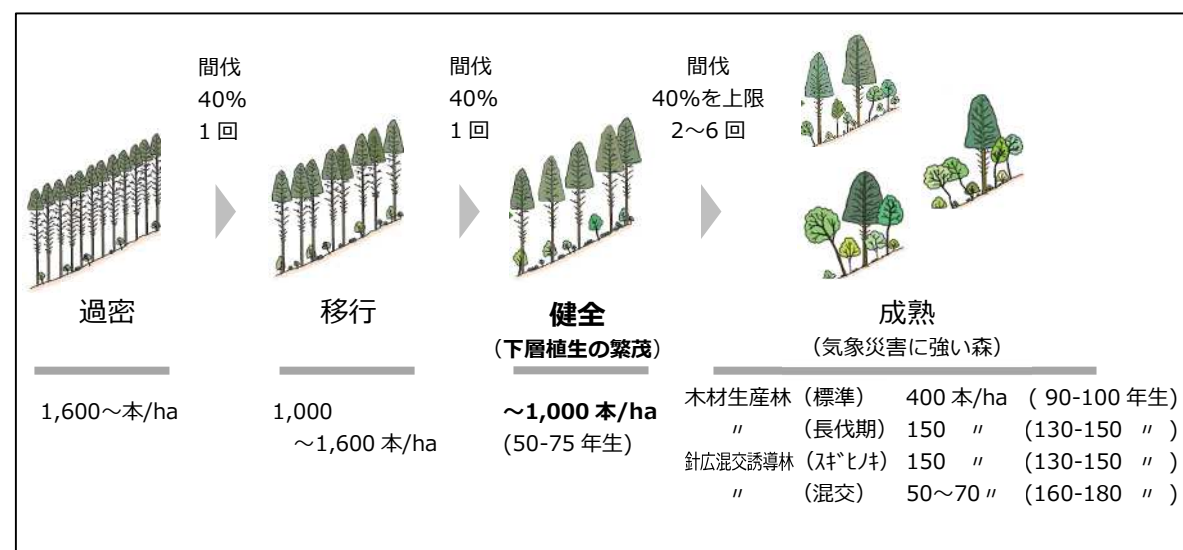


図 1 現在の森林施業の長期的方針

(2) これまでの森づくり委員会や個別ヒアリングでの議論

- 1,000 本/ha は現在の林齢での「健全」であり、時間の経過とともに健全性が低下するため、引き続き間伐を進める必要性あり
- 特に下層植生は間伐後、時間の経過とともに林冠が閉鎖し、光環境が悪化するため、次第に衰退

(3) 引き続き間伐を進める上での課題

- 下層植生が繁茂した後（健全ステージへの到達後）、**下層植生の維持に向けた間伐の方針**が新たに必要
- 必要な視点として、公費の有効活用に向けた、**持続可能な方針**が必要

2 対応策案

(1) 方針案

- 健全ステージは、「下層植生が繁茂した状態が**長期間維持される森林**」と定義
- 過密・移行ステージの人工林は**間伐率 40%（目標 1,000 本/ha）**により下層植生の「**繁茂**」を目指す
- 健全ステージの人工林は**間伐率 50%（目標本数は設定しない）**により下層植生の「**維持**」を目指す
- 利用間伐は、この間伐率に拘らず、下層植生の繁茂・維持に配慮して実施**

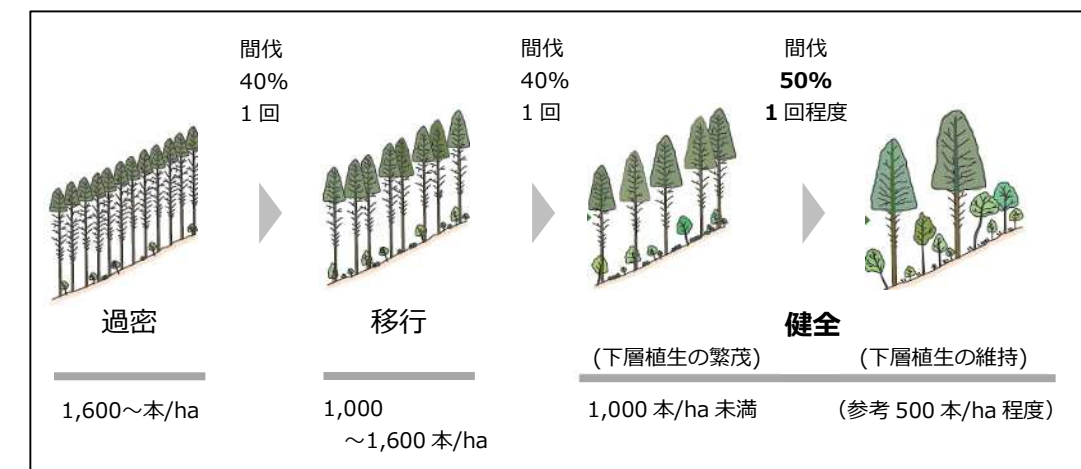


図 2 次期森林施業の長期的方針のイメージ図

(2) 健全ステージの維持に向けて間伐率を 50 %に引き上げる理由

- 間伐回数を少なくするため**

理由 間伐率を上げると、林冠が閉鎖し、林内照度が低下するまでの期間が長くなることから、下層植生が長期間繁茂

(3) 健全ステージの維持に向けた間伐回数

- 原則 1 回程度**とし、さらに間伐が必要かどうかはモニタリングにより検証

(4) 施業実施上の注意点

- 風倒被害を避けるため、劣勢木が多く残る林分では低い間伐率で実施
- 沢地形などの流木化しやすい箇所では、間伐率を高めるなどの対応

(5) その他

- ステージ区分のうち、**成熟ステージは健全ステージと統合**

理由 健全ステージの維持に向けた間伐が、成熟ステージの目的である、気象災害に強い森づくりに寄与するため